



官版

語彙

卷八

ホ 2
4706
8



燧一荷儀式二火燧一荷
運歩一荷持カ

いらか音

學風藝術あど一流を創めて
一家の風あるをいふ

いらかい音

官位の等級一つをいふ式部式上降二階叙
宇國下 かくて七日ありて人々をいふ給ふ

云云とんかろうあり一ういことえくありのうと三位のわりの給ふ
出雲消息一階隔者下馬歟運歩一階宮ツカイ

いらかい音

ひとあわひひとのいふ意わたり天神宮式天井
一蓋内藏式大笠一蓋

いらかう音

ひとむきの意一向の音あり三寶七
一向交易奉進運歩一向カツ

いらかう音

ひとのの意よて書面一通をいふあり
○一行太閤記各五千石の一行を令頂戴
尺素往來敢不可及

入部之規式尤勇々布見えけり
武家之御一行哉慶節一行狀

いらかう音

僧親鸞のひろめたる佛宗あり
運歩一向宗シツカウ

いらかい音

木名うらぎの下ふ
詳小せり

いらか音

北國小産する海獸の角より長さ二三尺より
四五尺以上小至る太さ入腕小過る末細し

外面の螺旋の縦理あり白色緻密其質象牙小勝る此獸の名を角魚と稱す
全體魚の如く其形とあり小似たり背の暗色より黒斑あり脇
腹小至り次第小角の長さ其身小半せり故小角の長さ一丈小及ぶ
者身の長二丈許ありと然もこの上鴈の牙より角は非ざるといへり

いらか音

一格の字音自ら一の格式を立て
他小従りたるをいふ

いらか音

いらか音同ト太平十三 白く毛ある
馬の毛をいふをいふを立てふとたつ

いらか音

いらか音同ト 齋く意うの權よて神社の
木といふ記中美母呂能伊豆加斯賀母登

いらか音

由々斯伎加母加志波良表登賣垂仁記是以倭姫命
以天照大神鎮坐於磯城嚴檀之本而祠之

いらか音

いらか音同ト 源五 今ハ天下を御心小
厳重あるをいふのあがむるなり又威光の
あるをいふをいふ

いらか音

いらか音同ト 今ハ天下を御心小
くけ給へるをいふをいふのつらき御中又乙女らのさしを
うらむと昔のためよりものつらき御あり

いらか音

いらか音同ト 今ハ天下を御心小
いづ

ひづかた

何族にてドチラと云ふ同ド拾遺春風ふけが
うたもさだめどちる花をのぐく入行をると
かそこむ源多良ひづかたゆし思ひゆくとどそのゆふえたが孫聞えむ又尋木
ひづかたふつけし人も人まろくちうたあうりける御物語とあそ又源冊ひづかたもく
こころいふひづかたあうりあふらん
山風のもらう山路舟よとひ

ひづかたぎよ

トツチミチといふ意あり源浮舟ひづかた
やあふあふといわくこそあふあふとも

ひづかちう

武家の僕従といふ語より一家の臣を
總ていふ語あり○一家中

ひづかど

一つの圭角ある意よりイツカドの人物あど
りふ又轉じてあふりの意あふりへり

ひづかのせち

御南苑觀騎射詔曰昔五節常用菖蒲為纒比來已停此事從今而後
非菖蒲纒者勿入宮中大神宮儀式帳五日節疍菖蒲蓬等供奉

ひづかんせり

飛來一閑といふ人の創意より紙糊の
上を漆りて塗たる器といふ

ひづか

齋内親王といふりあふりのさみの下小注
源神かものひづかひづかといふるのひづか

ひづか

ひづか

○羊婆奶

ひづき

十二年といふあり中務式延曆寺棲山
一紀僧位記運歩一紀一周年之義

ひづき

一年と一季とのひ半年と
半季といふ

ひづき

馬に乗たる一人といふ
慶節一騎馬上

ひづき

經基一基云燈臺一基云磬一基梅松論三條殿の六十六ヶ國小寺と
一宇づゝ建立一各安國寺と號一同塔婆一基を造立

ひづき

一群の兵の名あり太平長野が蠅拂一揆
一陣小進と懸たり云云桐一揆を始として

りづこう音

やうな物ひとろひ

りづこう音

臨時祭式鎌一勾魚ひとろひ運歩一候魚イッコン

りづこう音

麩粉と濃中紫糖と包と一面を焦くわる

りづ音

菓子あり一口餡の字と用お来まり〇蟹餅

りづ音

ひとろの國とろ式部式下先引東海道一國

りづ音

朝集使及郡司等入屯立庭中一

りづ音

漏刻の語其下注一〇一刻

りづ音

一國一城を鎖閉しと入と

りづ音

和同せる義あり

りづ音

酒宴の時盃の數あり雲圖抄次辨祭一獻

相模入道數盃とろひもけあひひ和しと立てゆら運歩一獻イッコン

りづ音

魚一つとりひ一候の音轉あり塵添塩裏抄魚

りづ音

紅花大一斤と以て一匹の絹を染るて紅の

白青の狩衣山槐記治養三年茶添一斤添別當時忠着一斤添衣一

りづ音

無論高下一切禁斷

りづ音

古の量數ありて一勺の十分の一あり

りづ音

〇一秒俗間あり一丈の字を用ぬる

りづ音

飯の菜の一種とりひ

給ふ平家四一切經七十餘卷

りづ音

佛書經律論の三藏ととくとりひ天武紀始

りづ音

願普天之下一切衆生皆蒙解脫

りづ音

意あり〇一雙

りつちあゆみ (音)

りつちあゆみ (音) ○りつちあゆみ

四時祭式上 監一勺二撮
拾芥下十撮為夕

りつちあゆみ (音)

りつちあゆみ (音)

雜令 權衡廿四銖為兩 謂以鉅黍中者百黍為大兩一兩十六兩為斤

りつちあゆみ (音)

りつちあゆみ (音)

りつちあゆみ (音)

一種一瓶者衆中之課役賄引出物者亭主奔走歟

ひと夜やどるるをりつちあゆみ 大學式皆清齋於學館一宿運歩一宿シカ

壘のりつちあゆみ合と十のりつちあゆみたる其ひつちあゆみ俗のりつちあゆみの字を用ゆるなり ○一勺

一首の字音なり 詩歌文章等のりつちあゆみ 万二作歌一首運歩一首詩歌

衡のりつちあゆみ一兩を廿四のりつちあゆみたる其ひつちあゆみ方今の一兩のりつちあゆみの大一兩也

金銀幣のりつちあゆみ三弔七分五厘のりつちあゆみ ○一銖

雲州消息上 嘉肴一種慶節一種肴數

一種物より出て肴の異名とわらるるなり 東上 各相具一種一瓶於演獻之庭訓往來

りつちあゆみ (音)

或一支具と書是をりつちあゆみとせ 太平カニ 縮シカ 運歩 縮具足

りつちあゆみ (音)

りつちあゆみ (音)

氷室一所 雲圖抄上 一所拜 属星之座 又四 次下仕參 參了又召他所也

りつちあゆみ (音)

一升、十升為斗、十斗為斛、四時祭式上 塩一升、又漆一升、拾芥抄下 十合為升、沙石集 一升のりつちあゆみ、一升入るとりつちあゆみ

りつちあゆみ (音)

りつちあゆみ (音)

積六万四千八百二十七、又水升あり、木厚四分内方、四寸九分深二寸七分断弦あり、積上小同

ひと所れをりたる地と命ふけたる

宗長手記云、あまの疲侍一所

懸命の知行もあれたる庭訓往來於譜代相傳之

ひと所れをりたる

度、ひの一分と十ありせたるなり。雜令九度十分爲寸。謂度者分寸尺丈也。所以度長短也。分者以北方極泰中者一之廣爲分。極者黑黍也。

十寸爲尺、一尺二寸爲大尺、一尺十寸爲丈。公式令九度十分爲寸。字、後藤、あまの

まんと、紙のつゝとてやう、枕、めと一寸

ひと所れをりたる

ひと所れをりたる、一寸法師の意とて身の矮き人とのみ

ひと所れをりたる

今名、校尾螺の一種、小うと美あるものなり

ひと所れをりたる

一種の肴と持出て集會して興を催せり。日本紀畧、康保元年云、是日於左近陣座諸

御有一種物、續古事談、殿上の一種物、常の事あり。絶たる。崇徳院の末、方頭中將公能朝臣絶と續き、廢せたるを興とて、神無月の晦比殿上の一種物あり。けり。塵添、瑤囊抄、一種物とて、行事の朝廷古来の詞也。喻、各一種物とて、隨身して會合せり。

ひと所れをりたる

一水の音よと、瀧とりのんが如し。井と濁とて、イツス、井モノイ、酒ハイツス、井モノ又、よとのみ

ひと所れをりたる

うまれとて死ぬるもの

ひと所れをりたる

田地より、三十歩をあらせとて一畝とて、むろし、三十六歩なり。一畝

ひと所れをりたる

一世一代の音、一生、此度を限りとて、り、俳優、あまの扱ひのみ

ひと所れをりたる

角一隻、又、銚一隻、太神宮式、金鉤形一隻、齋宮式

槽一隻、中務式、鐵尺一隻、長一尺、民部式、上圓槽一隻

ひと所れをりたる

アルバン、又、アルヨの意あり。類聚往來、一、有、來訪、多生、嘉會也

ひと所れをりたる

樂のひと、儀式、九、左、鼓、撃、下、介、九、段、手、一、節、三、節、擊

ひと所れをりたる

音と誤りたるなり。一切の

ひと所れをりたる

ひとりの説、又、ある説、とのみ、意あり。運歩、一、説、セツ

いつのまじ

いつばり音

いつばり音

いつばり音

いつばり音

雲州消息 頌茅戸之一盃

いつばり

大ある手洗一盃有り

いつばり俗

いつばり

何の時なり枕八あまのやうのつりの

鳥一羽のつり音

が方角音のつり音雲圖抄一方大将奏左右

若両方大将有障之時上卿奏之

一わび禮拜音のつり音太神宮式音而段

ひしこ音のつり音酒のむ時のつり音詞あり

大草相傳聞書のつり音のつり音塩音のつり音酒音のつり音

一探音のつり音のつり音十分音のつり音満音る音のつり音

寶物集五後音のつり音懺悔音のつり音のつり音

鷺の一種、最小音のつり音のつり音肉音少音く

僅音のつり音のつり音のつり音のつり音

葉集のつり音のつり音のつり音のつり音

いつばり

いつばり音

あまのつり音のつり音のつり音

いつばり

古今音のつり音のつり音のつり音のつり音

いつばり音

はつり音のつり音のつり音のつり音のつり音

いつばり音

いつばり

一度の飯音のつり音のつり音のつり音のつり音

吾景卷八

いつ

〇廿二

りらびん音

獸類のりら四時祭式上馬一疋字拾十三大き

りらびん音

縮布の類二端を合せて一匹馬のりら匹四時祭式上純一匹二丈五尺

りらびん音

ひらびん音一筆

りらびん音

極く品の上のりら又

りらびん音

百とのりら紙又紙一百張又錢一百文

りらびん音

書状のりら運歩一封紙

りらびん音

書画のりら物のりら庭訓往来細金

りらびん音

煙草茶薬のりら運歩一幅紙

りらびん音

あやう母の腹兄弟を

りらびん音

兄弟のりら慶節一腹生同父母

りらびん音

煎茶のりら人のりら一服一錢と與ふ

水のりら茶のりら海道遠江國今善光寺の前の一服一錢の茶屋小立寄

りらびん音

衡のりら十分ちちと云十釐あり

りらびん音

時刻のりら一分分あり一字を六十秒

りらびん音

神を祭る器の名ありのりら清くと云

帝登のりら敷伊豆閑黒益之

りらびん音

何邊のりらの方の意あり方秋の田の

りらびん音

庭訓のりら一種一瓶者衆中之課役運歩二瓶

りらびん音

扇又杓のりら四時祭式上杓一柄太神宮式

りらびん音

手銚一柄圖書式如意一柄慶節一柄扇

草名をこ糸ぐらふの

下注せ

次條ふ

注せ

杏葉の如く花ぢあまら

剪カ股の一種海邊砂中小生トして處處々より葉を出せ形濶くして三五小分色銀

阿波俗

草名をこ糸ぐらふの

鷓鴣の尾小ある銀杏の

葉の如き羽とりの

十字小四截たる者を

白果樹の葉に似たるもの名づ

體言御筆との

方一珠だまを

遠神吾大王の行幸の

他への

落窪

天皇の行幸一給ふ

サレ

給ふ

カ

行幸一給ひてある

神代紀下 天照大神之子所轄 道路有如此 屈之者誰也

方三幸而あそびたすひーミけむらふの

オイデナサル

意あり

オイデナサレテアル

意あり

方ハ 紀竟宴歌 美可利須留 幾見加弊留 止天々女加波仁比度古止 奴之

曾以天末世 利分留

むらの博士家小毛氏が傳鄭玄が箋をわく

のりい傳字の偏ケの箋字の冠あり

源若紫 物よりあそをね

地中よりあつる涌出る湯をの

下注せ 温泉後拾遺 つかもせをこひ

涙をみちまらふちの湯あつるの

のこみけが有馬あつるの

のこみけの袖の

〇丹丸

〇丹丸

いごぬ ○ごぬ

源柏木 いごぬの御りせぬの方か入り給へり
金葉雜 出居ゆあまきれりけり小弓ととりて

いご

古言ゆのわづらひて最痛疾甚等の字を
うけり イタツテ とりぬが如し 記上 甚久難待
[万三] いごだもこち宿の橋甚 ちうくうあて
この沖とあつめてあまゆるもの最りゆをこひのまを
けり秋風のあまんとをまたた伊等とわらうも 後撰雜 岩の上小
旅寝とよむべり いごぬ 苔の衣とよむふらふらん

いご 西京俗

物稱 小兒をいご京よて
いご 稱よて

いご

蚕の吐たる絲をいご又ハ木棉の絲麻の絲
をいご 記中 即知自鉞定出之狀而從絲尋
行者至美和山留神社 万七 河内女が手深の絲をらうへ
片絲ゆあまきれらんと思へや 和 絲 即 鉞 定 出 之 狀 而 從 絲 尋

いご

大上臈名事 ゆめあつとりの 下小注よて
海苔菜の下小
注よて

いごあまきれ 佐渡俗

いごんげん 俗

いごう 音

いごうり 俗

いごうを 俗

いごあざ

いごあり 俗

いごかけひ 俗

いごかけむら 俗

いごかけき 東京俗

いごかけし 江州俗

いご

客あどとまを所とりぬておこのともいふあり
齋宮式 其寢殿物給忌部出居殿物給中臣

古言ゆのわづらひて最痛疾甚等の字を
うけり イタツテ とりぬが如し 記上 甚久難待

蚕の吐たる絲をいご又ハ木棉の絲麻の絲
をいご 記中 即知自鉞定出之狀而從絲尋

大上臈名事 ゆめあつとりの 下小注よて
海苔菜の下小
注よて

菜豆莢を縷切たるもの生薑
胡蘿蔔并小あまの
異あること同トもいごあまを
いご 運歩異同トハ

瓜名 つちあまの
下小注よて

魚名 いごうりだひの
下小注よて

絲を綴たる甲をいご 平家 長門本 絲むら
をいご 糸 目結の直垂とき

織物の名あり 線よて
織たるをいご

螺類 蝸 蠶 小似たる小螺より外の
縦理太く白絲を以て絡たるが如し

魚名 いごんげんをらだひの
下小注よて

草名 いごせんづもの
下小注よて

りこがひ俗

螺類のりこがひあやとり

りこがや俗

草名龍常草の
下注ま

りこぎまじやう俗

草名ひめぎまじやうの
下注ま

りこまじやう俗 加訓 和

りこまじやう俗 同源相壺のりこまじやう俗と
ゆひよあやとり世とちた志ひめまじやう俗のりこ
陶器の底にある筋をひめまじやう俗と云ふ
糸を以て絞取り取れる跡をひめまじやう俗

りこまじやう俗 ひめまじやう俗

糸を以て絞切り圓扁なる
糕まと云ふ

りこまじやうだんご俗

繭より繰出せる時の糸の
端をひめまじやう俗と云ふ

りこまじやう俗

琴あどと弾く優劣をあらわすあどと云ふ
なり宇と云ふそとも感したる手をと云ふ

りこまじやう俗

侍従の朝臣と糸
をくと云ふ

りこまじやう俗

草名と云ふ
下注ま

りこまじやう俗

粟の縷切を
りこまじやう俗

りこまじやう俗

魚名のりこまじやう俗
下注ま

りこまじやう俗

糸を縫合せられた木棉よて
糸を繰出せる器あり

りこまじやう俗

細摺をりこまじやう俗 東宮と云ふと云ふ
りこまじやう俗と云ふと云ふと云ふ

りこまじやう俗

絳毛の車を畧しそりあがりりこまじやう俗の車の
下注ま 宇藏閣下のりこまじやう俗と云ふと云ふと云ふ

十四うきあがり又のりこまじやう俗のりこまじやう俗と云ふと云ふと云ふ
宮の御うき十六御の御うき廿ひらうけ廿源皇ひ廿と云ふと云ふと云ふ

うけのりこまじやう俗
つら六

りこまじやう俗 加訓 和

ひめまじやう俗 同御堂開白集のりこまじやう俗と云ふと云ふと云ふ
見らるる植けむ花のものと云ふと云ふと云ふ

りこまじやう俗 加訓 和

兒のりこまじやう俗と云ふと云ふと云ふ
やと云ふと云ふと云ふ

天廿のりこまじやう俗と云ふと云ふと云ふ
今宵の月よ面うけ廿と云ふと云ふと云ふ

吾景卷八

いと

しんげのくろも

檳榔毛の車の如く搥たる絲にて屋根及び物見の邊まで葺下あたる車あり其色種

々あり九紋金具と連絡して飾あり、院、后宫内親王、攝政、關白、あど乗らるる車あり原書ひさりの御車とてひさりあたるひさり三びらうげの金作六

此紫式部日記のしんげの御車ひさりの少輔のめのとこら宮のたき奉りてのる挑益貞信公絲毛元永二年三月七日中宮御料自院借召之

しんげのよもひ

絲にてあたるたる鑑とのひ普光院元服記大将拜賀義雅者着淺黄絲鑑帶金刀云云

馬前二行歩、馬毛黒隨兵皆着絲毛鑑甲敷皮とい各僕持之太平昔以上十二人色々の絲毛のよもひひさりグけ

しん

人と親し呼詞あり記上伊か古夜能伊能美詐等万伊か古名兄乃替

しん

前の意より出て父の甥姪とのひ和従父兄弟和名伊

しん

しん注しん注の下の

しん

祖父の従昆弟と

しん

祖父の従姉妹と

しん俗

苔類、山林陰地の樹根に着き、垂生して、形地衣に同く、あて深緑色、長二三尺、其

莖甚細く絲の如く

○萬纏草

しん

父の従昆弟とのひ

しん

○従祖父
豉羹中の小豆、褐腐、炙豆腐、胡蘿蔔等と混入たるものあり料理物語あづき牛房

のち大こんとうふをたうらうらふあ入中をせめてよ

しん俗

褐腐の細くあたるものとのひ

しん

従兄弟の妻とのひ

しん

○堂姉妹
父の従兄弟とのひ ○族父

しん

以字従祖伯叔ヲ弟ヲ父の従姉妹とのひ

しん

○従祖母
新お出来たる絲を大神宮におまが奉るをの太神宮儀式帳禰宜内人等養虫乃絲

語彙卷二

先乎、神宮并高宮及
官廻神奉進

ひびき

○あざなひびき ○あざなひびき
ひびき、ひびきの垂條、者、ひびきの珠、
大木あり、師、兼千首、さうりひびきのさうり

袖の絲、櫻、風、乱、ま、て、ち、ぬ、日、ぞ、ま、た、著、
常在法師の、櫻の、も、と、ふ、た、ま、と、待、り、け、る、と、

ひびき

○あざなひびき
鱈魚の、縷、切、た、る、も、の、と、
ひびき、諸魚、并、同、ト、

ひびき

平調の、樂、名、なり、
和、移、都、師、

ひびき

虫名、促、織、の、
下、注、せ、

ひびき

カ、マ、シ、イ、の、
意、あり、

ひびき

結、縷、草、の、一、種、其、葉、纖、細、なり、
絲、の、如、き、者、を、ひ、

ひびき

杉、の、一、種、木、直、上、り、て、枝、葉、
下、垂、ま、る、も、の、あり、

ひびき

山、崖、又、陰、地、に、生、ま、る、草、なり、て、葉、極、て、細、く、
龍、常、草、の、如、く、深、緑、色、長、さ、一、尺、餘、夏、月、莖、

ひびき

莖、を、抽、て、花、を、開、く、も、の、ま、げ、の、穂、に、似、て、
小、一、と、黒、一、後、實、を、結、ふ、○、崖、櫻、
苺、の、一、種、莖、葉、穂、と、も、小、細、く、一、と、穂、の、色、ハ、
紫、赤、色、あり、續、古、秋、の、と、ま、ま、た、こ、の、あり、

ひびき

丸、木、植、置、て、あ、だ、る、露、の、玉、の、を、お、せ、ん、仙、傳、抄、平、生、の、立、つ、と、の、へ、ん、と、も、
ま、う、ひ、ん、の、い、む、の、事、の、と、ま、ま、さ、あ、が、竹、○、石、せ、

ひびき

常、の、線、を、ひ、轉、し、て、蜘蛛、の、絲、を、ち、ぢ、か、ど、細、き、
物、の、稱、と、ま、ま、なり、和、線、須、知、絲、縷、也、

ひびき

ひびき、ひ、同、ト、轉、し、て、
茶、碗、等、の、底、を、ひ、

ひびき

ひびき、の、琴、の、属、ひ、け、の、笛、の、類、合、せ、て、樂、器、の、
名、と、し、轉、し、て、音、樂、の、事、と、し、神、樂、譜、星、

已、了、搔、返、絲、竹、之、天、可、仕、朝、倉、支、
催、堪、能、之、歌、人、須、

ひびき

絲、を、納、め、置、ま、る、紙、を、
製、ま、る、袋、を、ひ、

ひびき

經、を、麻、絲、縷、を、稻、稗、と、し、
織、た、る、席、を、ひ、

ひびき

細、き、麻、絲、を、て、卷、つ、の、漆、ぬ、り、た、る、弓、あり、
庭、訓、往、来、弓、者、本、重、藤、漆、籠、藤、絲、裏、等、也、

シヨウシヨウ (俗)

虫名、促織の
下小注也

シヨウシヨウ (俗)

魚名、いさよりの
下小注也

シヨウシヨウ

かざりひの下小注也 夫三雲あやふ雨の空

六百番歌合あもろけお千里をうけて見ゆらうあ春の光おあそふ糸ゆふ
正治二年百首らもろあ糸池おうのきる青柳や緑の空おあそふ糸ゆふ

シヨウシヨウ

糸を結びを飴ゆつるをりふ 宇祭使 かつて
夕ぐさおあそふだちをたわけりこゆあ
おあそふいさよりのこゆあおあそふいさよりの

また丁どもたてをうて榮音禁 ああおあそふいさよりのこゆあおあそふいさよりの

シヨウシヨウ (俗)

魚名、いさよりの
下小注也

シヨウシヨウ (俗)

同

シヨウシヨウ (俗)

魚名、形たひひ似て
身狭く鱗色淡紅お

して黄と青との筋数條あり尾の末上の方お
黄色の一糸と出せば長と短と身小均 ○金線魚

シヨウシヨウ

いさよりのこゆあを役とせたる女あり
中務式織部司四十八人 細部如

シヨウシヨウ

うづりの一名仙覺抄 五 いさよりのこゆあ
うと親類相通之心あゆらうとかなをうと

いさよりのこゆあ

シヨウシヨウ (俗)

草名、いさよりの
下小注也

シヨウシヨウ (俗)

的小矢を射中て賭物をとせたるをいさよりの
源若葉下 柳の葉をゆたびあそぶるべきとねく

いさよりのこゆあ ○又射ころもをいさよりの 盛衰 平家

いさよりのこゆあ

シヨウシヨウ (俗)

草名、おのこづちの
下小注也

語彙卷八

